

学校改善に生かす効果的な学校評価の進め方

- 内部評価と外部評価が融合する学校評価システムの再構築に着目して -

新町立新町第二小学校 小島 明

はじめに

今日、学校の自主・自律性を確立し、経営責任を明確化することは重要課題である。つまり、学校は、教育の質を保障し、信頼される存在になるために、自ら点検・評価を行い、結果を公表し、不断に学校改善に努めていく責務があると言える。

しかし、いわゆる学校評価は、従来も年度末を中心に展開されてきたが、概して学校改善に十分に生かされていないという経緯がある。教員にとって学校評価は切実感に欠けていたり、評価の結果から具体的なものが得にくいといった問題を抱えていたことが背景にあると思われる。本校でも、年に2回の外部評価を取り入れた学校評価を行っているが、内部評価と外部評価との関連性や位置付けが不明確であり、評価の結果を改善に生かしているとは言えない。

そこで、教育目標を具体化した中から生成された内部評価を軸とし、外部評価とのずれや共通点を見取り、組織的な検討から明確な課題や改善策を導く。それらを家庭や地域と共有していけるような内部評価と外部評価が融合した学校評価システムを再構築することで、学校評価のより効果的な推進が図られ、学校改善に生かすことができると考える。

研究のねらい

内部評価と外部評価が融合する学校評価システムを下記のように再構築することにより、効果的な学校評価の進め方を提言する。

学校評価システムが機能するような実施計画を作成し、教育目標の具体化と関連した羅針盤を作成するとともに、内部評価と外部評価の位置づけを明確にする。

内部評価を軸にして外部評価を機能させる「学校評価一覧表」を作成するとともに、結果の集計や分析・検討の手順や方法を示し、その一部（第1回点検・評価）を実践することで、課題や改善策が明確になり、改善に生かすことができることを検証する。

研究の内容

1 研究の基本的な考え方

(1) 学校改善に生かす学校評価とは

学校評価は学校改善に資することが大事であり、学校評価を行うことで、教育活動が改善され、教育の質が向上していく必要がある。本研究では、学校改善に生かす学校評価を次のようにとらえる。

評価の結果が教育目標との関連で経営の重点や方針と結び付いている。

評価の結果から成果と問題点が整理でき、成果はさらに充実・発展させ、問題点は改善していくという視点から、課題や改善策が明確になっている。

課題や改善策は保護者や地域と共有し、共に具体的な方策の実践へと向かうとともに、次年度に反映され、教育目標や計画が見直されていく。

外部評価を位置づけることで、一人一人の教職員の自己診断能力が高まるとともに、学

校評価への参画意識が高まり、学校としての自己評価能力が向上していく。

(2) 「内部評価と外部評価が融合する」とは

内部評価は学校の職員で行う自己点検・自己評価のことであり、外部評価は保護者や児童、地域（学校評議員等）が行うアンケート調査等による評価や、評価結果や改善点を公表した後の意見聴取などにとらえる。学校評価はあくまでも自己点検・自己評価である内部評価を中核とし、外部評価は内部評価を補完する意味で行う。「内部評価と外部評価が融合する」とは、両者に共通する視点や項目を取り入れ、両者の意識のずれを見取り分析して、その方向性や互いの果たすべき役割を明確にすることであり、単なる評価者ではなく、支援者として機能することであると考える。

(3) 「学校評価システムの再構築」とは

学校評価システムとは、校内が組織をあげて評価活動に参画できるようにするための体制であり、家庭・地域に評価結果を公表し、その結果を教育活動にフィードバックしていくことを念頭においた組織的・継続的な評価活動のこと考える。本研究では、本校の今までの学校評価の成果や課題を踏まえ、群馬県の学校評価改善委員会（以下「県」）が示す群馬県の「学校評価システム」の方向性や特色を生かし、学校改善に活かせるような機能的な仕組みを整える。学校の評価は、「P D C A」のマネジメントの流れで進むが、

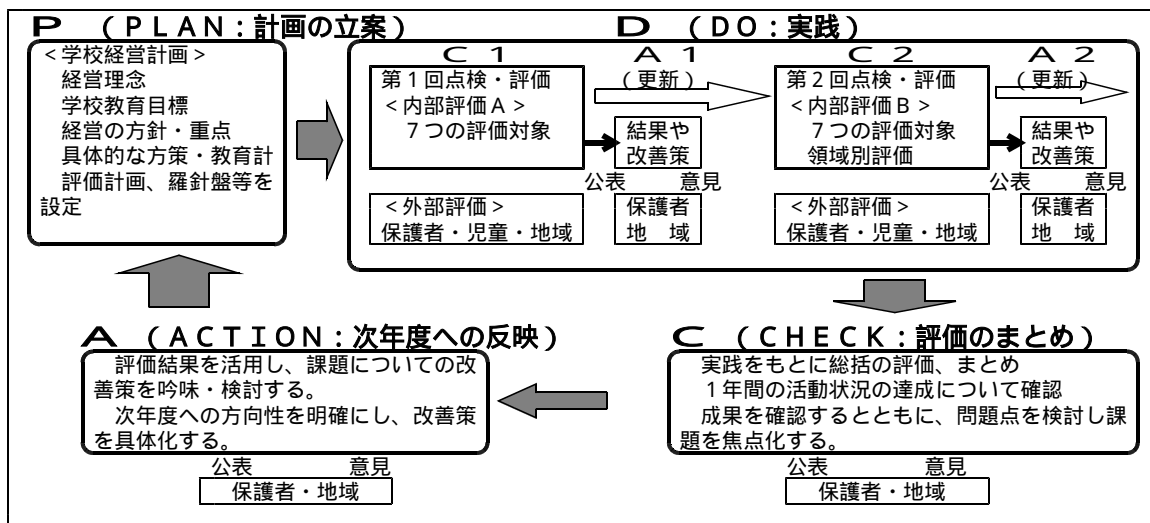


図1 「P D (C1 A1 C2 A2) C A」の学校評価システムの概略

D（実施）の過程には、2つの点検・評価を位置付ける。第1回の点検・評価（C1）は年度当初に保護者や地域住民に情報発信しておいた7つの評価対象について7月に実施する。その評価結果から具体化された課題や改善策を基に実践を行う（A1）。第2回目の点検・評価（C2）は12月に実施する。第1回と同様に7つの評価対象について行い、課題が解決できたかをよく吟味し、年度末までの改善策を焦点化する。また、同時に領域別の点検・評価も実施し、C（評価のまとめ）において、多面的な視点から考察できるようにする。以上のように、学校評価システムを「P D (C1 A1 C2 A2) C A」の流れ（以下「PDCACA 学校評価システム」）として整理した。

2 学校評価の計画の立案

(1) 実施計画の作成と学校評価の組織的な体制づくり

学校評価の1年間を通しての流れを共通理解し、「PDCACA 学校評価システム」を機能させるために、表1のような学校評価の実施計画を作成した。実施計画には、1年間の大

表1 学校経営の実施計画

月	過程 (PDCA)	学校評価委員会の機能	学 校	家庭・地域等	
			長期的スパンの評価	短期的スパンの評価	
4	P 計画	学年・学級・教科等の目標や指導の重点、方策等を検討 年間評価計画の作成 評価項目等を検討 各学年や分掌等における自己評価項目、外部評価項目検討	<PLAN> (計画の立案) 学校教育目標 学校経営方針・重点 教育計画等 年間評価計画の作成 羅針盤(評価対象や評価項目等)の策定 方策の原案 検討	入学式(自己評価) 学年学級経営 (児童の作文等) 学年経営方針 学級経営方針 春の遠足 (作文等)	情報提供 ・学校通信 ・PTA 全体委員会 ・PTA 総会 ・授業参観 ・学級懇談会 ・学年通信
5		外部評価作成 外部評価集計・分析 改善策原案作成	共通理解		意見聴取 学校評議員会
6	D 実践	自己評価作成・分析(ブロック・学年) 自己評価・集計 ・学習状況 ・心の教育点検項目(なかまづくり) 自己評価(安全部) 自己評価・外部評価作成(保健部)	共通理解	プール清掃(感想等) 期の自己評価 避難訓練 学校保健委員会(自己評価) 授業公開 神流川クリーン作戦(感想等)	家庭訪問(意見や要望等) PTA 学校保健委員会(外部評価) 参観者による外部評価(意見や感想等) 学校評議員 外部評価 ・保護者・児童 ・学校評議員
7	C1 評価	自己評価作成(高学年ブロック) 自己評価・外部評価作成 (職員・児童・保護者 学校評議員)	【第1回点検・評価】 自己評価・外部評価 ・具体的数値項目、方策に応じた点検・評価 ・評価対象を中心に点検評価 ・特に、きめ細かな指導の状況を把握する。		公表 保護者や評議員(結果と改善策) (学校通信など)
8	A1 更新	集計・分析・考察 改善策の原案作成	結果の共通理解・改善策の検討		意見聴取 PTA 環境整備研修会 外部評価(保護者)
9		自己評価・外部評価作成(体育部) (職員・児童・保護者) 自己評価作成 ・学習状況 ・心の教育点検項目(出番づくり) 自己評価(安全部) 自己評価作成 (体育部)職員・児童 自己評価作成 (学年)職員・児童 自己・外部評価作成 (音楽部) 自己評価作成 (体育部)職員・児童 自己評価(安全部)	共通理解	大運動会(自己評価) 期の自己評価 避難訓練(自己評価) 陸上大会(自己評価) 修学旅行(自己評価) 授業公開・音楽発表会(自己評価) マラソン大会(自己評価) 避難訓練(自己評価)	参観者による外部評価(意見や感想等) 参観者からの感想等 講師からの意見や感想 外部評価 ・保護者 ・学校評議員
10		自己評価・外部評価作成 (職員・児童・保護者 学校評議員)	【第2回点検・評価】 自己評価・外部評価 ・具体的数値項目、方策に応じた点検・評価 ・評価対象を中心にしながらも、学校運営全般を点検評価		公表 保護者や評議員(結果と改善策) (学校通信など)
11		集計・分析・考察 改善策の原案作成	結果の共通理解・改善策の検討		意見聴取 参観者による外部評価(意見や感想等)
12	C2 評価	自己・外部評価作成(総合的な学習部) 職員・児童	共通理解	授業公開・ふれあいフェスティバル(自己評価)	参観者による外部評価(意見や感想等)
1	A2 更新	自己評価・外部評価作成 (職員・児童・保護者 学校評議員)	<CHECK> (学校評価のまとめ) 1年間の活動状況の成果を確認するとともに、問題点を検討し、課題についての具体策を吟味・検討する。		公表・説明 ・学校通信 ・PTA 全体委員 ・学校評議員 意見聴取
2	C 評価のまとめ	学校評価の総合的な整理と分析 成果や問題点 課題の焦点化	<ACTION> (次年度への反映) 次年度の課題解決のための具体的な方策の検討し、教育課程に反映できるようにする。 次年度の評価対象や評価項目等の検討	卒業式(自己評価)	公表・説明 ・学校通信 ・PTA 全体委員 ・学校評議員 意見聴取
3	A 次年度への反映	次年度の教育課程の編成、評価項目等の改善案の作成			

きな流れ「P D (C 1 A I C 2 A 2) C A」に基づいた「長期的なスパンの評価」と、行事等を節目として評価していく「短期的なスパンの評価」を位置付けた。さらに、その二つの評価が家庭や地域等の外部評価とどのように関連しているかが分かるようにした。また、学校評価の具体的な推進は、計画・実施・結果の整理・分析・公表等の他、それぞれの過程における連絡調整など、多岐にわたる仕事がある。これらの業務が組織的に推進され、学校体制として機能的な学校評価システムを確立していく必要がある。しかし、新たな組織を編成するのは負担感が高まると考え、既存の教育課程委員会に学校評価委員会としての機能を担わせ、学校評価の中心的な業務を遂行できるようにし、既存の運営組織が学校評価としての機能化できるようにする。このような体制を整えていくことにより、学校運営組織の活性化につながり、学校評価システムの機能化の母体ができるようになる。

(2) 学校教育目標と学校評価との関連と羅針盤の作成

県は、評価対象、評価項目、具体的数値項目のつながりをもった羅針盤を作成するよう

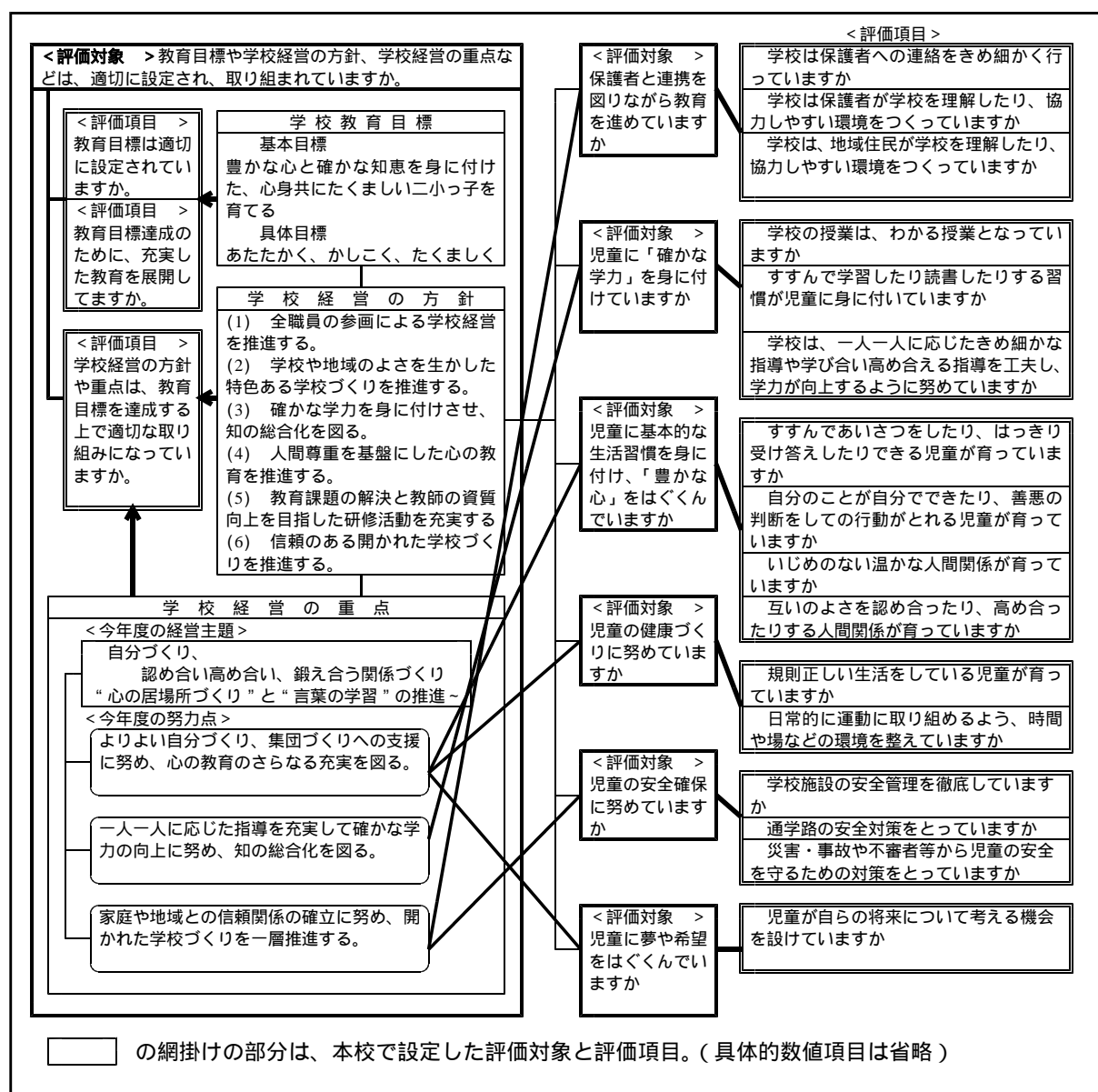


図2 教育目標と学校評価との関連図

に提示している。また、羅針盤には、各学校が共通に評価すべきものが提示してあり、県が示すものの他に各学校が独自に設定して追加することができるとしている。学校改善に活かす学校評価に結びつけるためには、教育目標が具体化された経営の方針や重点等を含めた達成状況を把握する必要があると考え、これを評価対象として加える。次に、県で提示した6つの評価対象や評価項目、具体的数値項目が教育目標等の評価対象のどの部分と密接に関連しているかを図2(4ページ参照)のように明確にする。評価対象を評価するのに不十分の場合には項目を追加する。以上のような点を踏まえて作成したのが、表2の羅針盤の一部である。羅針盤には、内部評価と外部評価の具体的数値項目の関連が分かりやすいようにした。作成した羅針盤をもとに、内部評価(児童)、外部評価(保護者、児童、学校評議員)の調査用紙を作成した。

表2 学校経営評価「羅針盤」一覧表

評価対象	外部評価		内部評価
	評価項目	具体的数値項目	数値項目(肯定的に答える職員が80%以上)
教育目標や学校経営の方針、学校経営の重点などは、適切に設定され、取り組まれていますか。	1 教育目標は適切に設定されていますか。	教育目標に保護者や地域の願いが盛り込まれていると答える保護者が80%以上である。 教育目標は分かりやすいと答える保護者が80%以上である。	教育目標は、児童・学校・地域の実態に即したものにしている。 教育目標は校長の経営方針や全職員の考えが反映されている。 教育目標は、学習指導要領の趣旨を生かしている。
	2 教育目標の達成のために、充実した教育活動が展開されていますか。	学校は教育目標の具現化に向けた取り組みを行っているという保護者と評議員が80%以上である。 豊かな心と確かな知恵を身に付けた、心身共にたくましい児童が育ちつつあると答える保護者が80%以上である。	教育目標を具現化するための方針や重点に基づき、教育課程が実施されている。 教育活動が充実して取り組み、教育目標が達成される方向に進んでいる。
	3 学校経営の方針や重点は、教育目標を達成する上での適切な取り組みになっていますか。		学校経営に全職員が参画している。 学校や地域のよさを生かした特色が表れている。 知の総合化を図り、確かな学力を身に付けている。 人間尊重を基盤にした心の教育が充実している。 充実した研修活動により、教育課題が解決したり教

3 外部評価を機能させる「学校評価一覧表」の作成について

本校では、第1回の点検・評価を7月に実施する。学校評価を実施後、評価の結果をどう集計・整理し、分析や検討が効果的に課題や改善策に結びついていくかが大切と考える。

児童に「確かな学力」を身に付けていますか		満足度%					達成度(A B C D)				
		職員	保護者	児童	評議員	総合					
1 学校の授業は、わかる授業となっているか	一人一人が「わかる」授業になっている。(職員)	→									
	学校の授業はわかる。(児童)	→									
	学校ではわかりやすい授業となるように工夫していると感じている。(保護者・学校評議員)	→									
	自分の子どもは、授業内容が理解できていると思う。(保護者)	→									
2 一人一人に基礎・基本が定着し、確かな学力が向上している。											
3 授業の中で学び方を身に付けさせたり、宿題や自主学習を奨励するなどにより、学習習慣が身に付いている。(職員)	自分から手をあげて発言したり、意見を言ったり、質問したりしている。(児童)										
	集中して授業を受けられるように、授業態度をきちんとしている。(児童)										
総合判定											
<内部評価(職員)の自由記述>		共通視点での具体的数値項目のまとめ									
<外部評価(保護者・児童・学校評議員等)の自由記述>							□ は総合的な達成度の判定であり、A B C Dで記述する。				

図3 「学校経営評価一覧表」の集計方法

そのためには、内部評価と外部評価の満足度や達成度、それぞれの意見や考え等が一覧で示される必要があると考え図3のような「学校評価一覧表」を作成した。この表は、職員、保護者、児童、学校評議員の具体的数値項目や評価を同時に見て分析・検討できるようになっている。また、具体的数値項目は、評価する立場によって質問の仕方や内容が異なる場合あったり、共通する視点に関連する質問項目も分析に加えたりできるようにした。さらには、調査用紙の自由記述欄の記載事項の要旨をまとめ、分析や検討に加えることができるようにした。このような「学校評価一覧表」を活用して評価の結果を分析・検討することを通して、内部評価と外部評価の意識のずれを把握しやすくなり、成果や問題点が明確になると考える。

第2回の点検・評価は12月に実施する。調査用紙は第1回と同様なものを使用し、第1回以降の取組や課題の解決状況を評価できるようにする。また、PDCACA学校評価システムのC（評価のまとめ）の総括的な資料となるように、表3のような「学校評価一覧表」を作成する。この表は、第1回と第2回の評価結果が比較しやすいようにした。さらに、第1回の課題解決の状況から成果や問題点を見出し、年度末までの重点的な取組を明確にできるようにした。また、評価の総括として、多面的な視点から分析・検討するために実施した領域別自己点検・自己評価の結果と関連づけ、評価結果等の公表後の意見を加えて、次年度の方向性が明確になるようにした。

表3 「学校経営評価一覧表」

児童に「確かな学力」を身に付けていますか											
1 学校の授業は、わかる授業となっているか 一人一人が「わかる」授業になっている。 学校の授業はわかる。 学校ではわかりやすい授業となるように工夫していると感じている。 自分の子どもは、授業内容が理解できていると思う。	第1回達成度					第2回達成度					総合的達成度
	職員	保護者	児童	評議員	総	職員	保護者	児童	評議員	総	
2 一人一人に基礎・基本が定着し、確かな学力が向上している。											
総合判定											
<内部評価（職員）の自由記述>						<内部評価（職員）の自由記述>					
<外部評価（保護者・児童・学校評議員等）の自由記述>						<外部評価（保護者・児童・学校評議員等）の自由記述>					
【第1回点検・評価】						【第2回点検・評価】					
<成果・問題点>			<課題>			<成果・問題点>			<年度末までの重点事項>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; height: 100px; display: flex; flex-direction: column; justify-content: space-between;"> <成果> <問題点> </div>			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; height: 100px; display: flex; flex-direction: column; justify-content: space-between;"> <課題> <改善策> </div>			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; height: 100px; display: flex; flex-direction: column; justify-content: space-between;"> <成果> <問題点> </div>			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; height: 100px; display: flex; flex-direction: column; justify-content: space-between;"> <年度末までの重点事項> 領域別自己点検・自己評価との関連事項 </div>		
<公表後の意見等>						<公表後の意見等>					
<次年度への課題>											

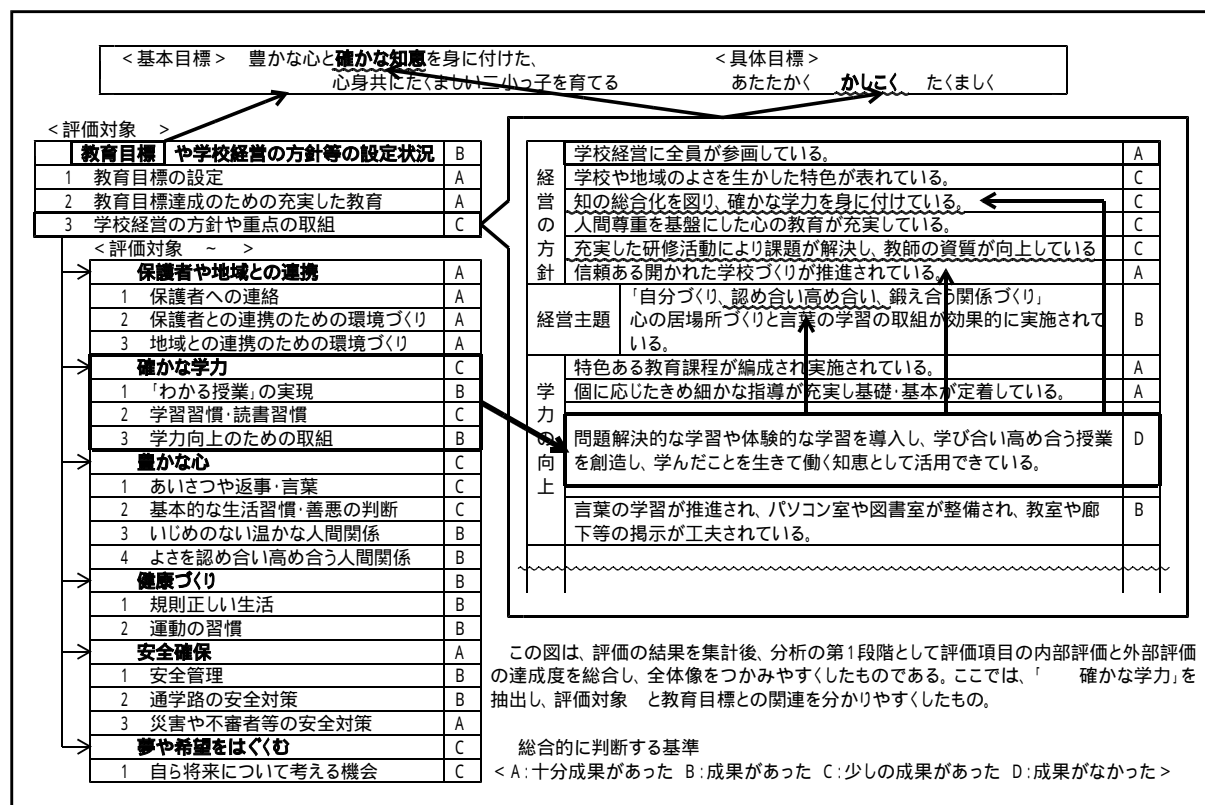
点検・評価の集計は学校評価委員会で分担して行い、エクセル（表計算）によって満足度を算出する。集計後は、教務主任が「学校評価一覧表」に整理して成果や問題点を洗い出し、課題の原案を作成して学校評価委員会で検討する。次に、学年・ブロック、分掌等で課題に対する改善策を検討し、教務主任が整理して職員会議で共通理解を図り、保護者や地域に公表する。公表後は、学校評議員会やPTAの会合、学校支援隊や学校指導員、学校協力員（児童の安全確保や授業等で協力するボランティア組織）などの活動の場で意見を聴取したり、共に解決できる方策を検討したり協力して実践したりできるようにする。このように、外部評価者が支援者となれるように、学校評価を機能させていく。

第1回点検・評価の実践

1 第1回点検・評価結果の全体像の分析

集計結果を分析する第1段階として全体像を把握する。図4は、評価対象ごとに評価項目の総合評価（内部評価と外部評価の達成度を総括したもの）を一覧にしたものである。教育目標の設定状況は満足いくものであるが、取組状況の評価は低い。しかも、職員は69.4%に対して保護者は91.7%という満足度のずれがあった。これは、「学校経営に全職員が参画している」がAという評価からも、職員が目指す方向をしっかりと共通理解しており、まだ実践の中間地点にいることを認識しているためと考える。成果としては、保護者との連携や安全確保であり、開かれた学校づくりが効果的に推進されていると言える。一方、

図4 第1回点検・評価の総合的な評価の全体像と評価対象1との関連



「確かな学力」と「豊かな心」、「夢や希望をはぐくむ」が低い評価であった。「確かな学力」を評価対象の「学校経営の方針や取組」から分析してみると、経営の重点の「学力の向上」の具体的数値項目である「問題解決的な学習や体験的な学習」「学び合い高め合う授業」「生きて働く知恵」をキーワードとする評価がDという低い評価だが、きめ細かな指導の推進は十分満足できる評価を得ている。また、経営の方針の「研修活動の充実」がまだ成果が得られていないことから、指導体制に視点がいきがちであったきめ細かな指導の研究実践に軌道修正が必要なこと、さらには、学習習慣や読書習慣の形成が必要なことが分析していく方向性として浮き彫りにされる。

2 「学校評価一覧表」集計結果の分析・検討と改善に向けての取組

総合的な評価の全体像から課題の方向性を把握することができたら、次に、「学校評価一覧表」から内部評価と外部評価を比較検討し、課題を明確にする段階である。表4は、

評価対象 「確かな学力」を抽出した「学校評価一覧表」と、その評価結果から成果と問題点を分析し、課題や改善策を検討した結果とその後の取組状況を図で表したものである。まず、「わかる授業」「きめ細かな指導」に関する数値項目を見ると、内部評価と外表4 「学校評価一覧表」の集計と分析結果（評価対象を抽出）

児童に「確かな学力」を身に付けていますか										
1 学校の授業は、わかる授業となっているか		職員	保護者	児童		評議員	総合			
1	一人一人が「わかる」授業になっている。 学校の授業はわかる。 学校ではわかりやすい授業となるように工夫していると感じている。 自分の子どもは、授業内容が理解できていると思う。	93.8	A	90.7 81.3	A B	92.1	A	100	A	A
2	一人一人に基礎・基本が定着し、確かな学力が向上している。	73.3	C							C
3	授業の中で学び方を身に付けさせたり、宿題や自主学習を奨励するなどにより、学習習慣が身に付いている。 自分から手をあげて発言したり、意見を言ったり、質問したりしている。 集中して授業を受けられるように、授業態度をきちんとしている。	75 58.7	C C			79.5 84.6	B B			C
総合判定		80.7	B	86	B	83.1	B	100	A	B
2 すずんで学習したり読書したりする習慣が児童に身に付いているか		職員	保護者	児童		評議員	総合			
1	宿題や自主学習を必ずやってくる。 家庭学習の時間が発達段階に応じた適切な量である。 子どもの家庭学習（質・量・時間）に満足している。 家庭で授業のことを話題にする。 宿題や自主学習を時間を決めて親に言わずに進んで行っている。	62.5	C	57.9 59.7 52.4	C C C	62.9 71.5 73	C C C			C
2	読書習慣が身に付いている。 子どもたちの読書の量や質が向上してきている。 読書の時間が発達段階に応じた適切な量である。 読書の内容や時間に満足している。	33.3 52.9	D C	44.1	D	46.5	D			C
総合判定		49.6	D	53.5	C	63.5	C			C
3 学校は、一人一人に応じたきめ細かな指導や学び合い高め合える指導を工夫し、学力が向上するように努めているか		職員	保護者	児童		評議員	総合			
1	T T 授業や少人数授業等のきめ細かな指導が効果的に展開している。 きめ細かな指導はわかりやすい。 きめ細かな指導について関心がある。 きめ細かな指導は効果的だと思う。	94.1	A	96.9 97.7	A A	91.2	A	100 100	A A	A
2	授業で自己存在感が味わえ、学習への意欲が高まり、学ぶ楽しさを実感している。 授業は楽しい。	93.3	A			83.6	B			A
3	体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れている。	56.3	C							C
4	授業の中で自分を発揮でき、一人一人の考えや意見が生かされ、学び合い高め合い、より高い次元に考えが深まっている。 友だちと教え合ったり、友だちのがんばりに負けないように学習している。	50	D			89	A			C
5	各教科と総合的な学習の時間との関連を図り、知の総合化を図れるよう努めている。 学校で勉強したことが、その後の学習や生活に役立っている。	64.3	C			80.8	B			C
総合判定		71.6	C	97.3	A	86.2	B	100	A	B
総合評価		68.2	C	75	C	77.1	C	100	A	C

<内部> 低学年でもきめ細かな指導のよさを実感している。
 <外部> きめ細かな指導によって、子どもは算数が好きになった。
 授業が大事、わかりやすい授業ならば少人数授業でなくてもよいのでは。

<成果・問題点>

<成果>
 教師は「わかる授業」となるよう努力しており、児童も保護者も授業は「わかる」という認識。きめ細かな指導が効果的に推進されている。

<問題点>
 学力が「生きて働く力」まで高まっていない。
 学び合い高め合いという姿になっていない。児童はできるという意識だが教師は不十分という認識。授業の質を向上させていく必要がある。
 学び方や学習習慣について児童と教師の認識の差がある。根気強く指導していく必要あり。
 家庭学習や読書量の不足。

<課題>

きめ細かな指導の充実・改善を図り、授業の質的な向上を図る。
 （学力を生きて働く力として身に付ける）

児童の学習習慣を身に付ける。

読書の指導を充実させ、読書習慣を身に付ける。

<改善策>

授業はもちろん、学級の人間関係を育てる。
 一人一人の実態等に応じた教材・教具の工夫・改善を図る。
 体験的な学習や問題解決的な学習を取り入れる。
 総合と各教科等との関連を明確にする。
 算数の重点単元の克服を目標に、指導の充実改善を図る。

発言や意見等の発表の仕方等のルールを徹底して指導する。
 自由勉強を定着させる。学年が上がるにつれて自主的にできるように指導する。
 授業で学び方を身に付けさせる。

学校に書物を寄付してもらい学級文庫を充実させる。
 家庭に読書量の現状を知らせ、協力を啓発する。
 図書室の整備・管理方法の工夫。
 100冊読書。

<取組み状況>

校内研修の授業研究の積み重ねにおいて、指導の工夫に視点を置いて取り組み、きめ細かな指導を中心として授業の質的な向上に向けて共通理解を図りながら実践できた。

授業研究で意図的に学び合いの場を設けることができたが、ルールの定着には至っていない。
 自由勉強を奨励し、宿題の出し方を工夫した。

P T A の会議や学級懇談会で啓発を重ねた。
 学校支援隊や学校協力員と話し合い、図書室の管理や整備について具体的な方向性が持てた。

部評価ともに 90 % 以上の満足度である。児童は授業を楽しんでいると感じ、保護者や評議員は学校は授業を工夫していると評価しており、きめ細かな指導を中心としたわかりやすい授業が行われていることが成果と言える。次に、内部評価と外部評価のずれを分析し、問

題点を焦点化していく。「学び合い高め合い」の視点では、児童の達成度 A に対して職員は D という大きな開きがある。学び方、発言や意見発表の評価も同様である。「生きて働く力」の視点でも、児童の高い満足度に比べて職員は低い。問題解決的な学習や体験的な学習を積極的に取り入れてないという状況から見ると、このずれは、授業そのものの質的な改善を示唆していると同時に、授業改善の中で目標を高くもつことや自己評価能力を高めていく必要性を感じる。また、家庭学習の習慣や読書習慣の形成に関しては、内部評価も外部評価も共通して低い。家庭学習の自主的な取組は児童が 73 % に対して保護者や職員はかなり低い満足度である。読書には児童自身も満足していない。この結果を保護者や児童にも説明し、家庭と連携をとって指導していく必要がある。

以上のような評価結果の分析により、授業の質的な向上と学習や読書習慣の形成という課題を明確にすることができた。分析の過程や設定した課題を全体会で検討して共通理解を図り、学年ブロックや関係する分掌等で具体的な改善策について検討し、表 4 のような改善策と具体的な取組が見られた。きめ細かな指導の研究実践では、「少人数授業での各学級での授業改善」に研究の視点が焦点化され、一人一人の児童の実態等に応じて指導方法等の工夫を図っていくことの重要性を共通理解し、授業研究を重ねていくことができた。また、学習習慣や読書習慣を身に付けさせるために、「第 1 回学校経営評価の結果」の公表（図 6）を活用し、特に「確かな学力」の状況を中心に P T A の会議や学級懇談会で問題提起し、家庭への協力を啓発した。図書室の管理や整備に関しては、ボランティア組織である学校支援隊や学校協力員から協力を得られることになった。さらに、校内の国語部会と「言葉の学習推進委員会」、図書委員会と連携を図り、「100 冊読書」の取組が行われるとともに、学期に 1 度の読書週間を設けるなど具体的な取組が見られた。

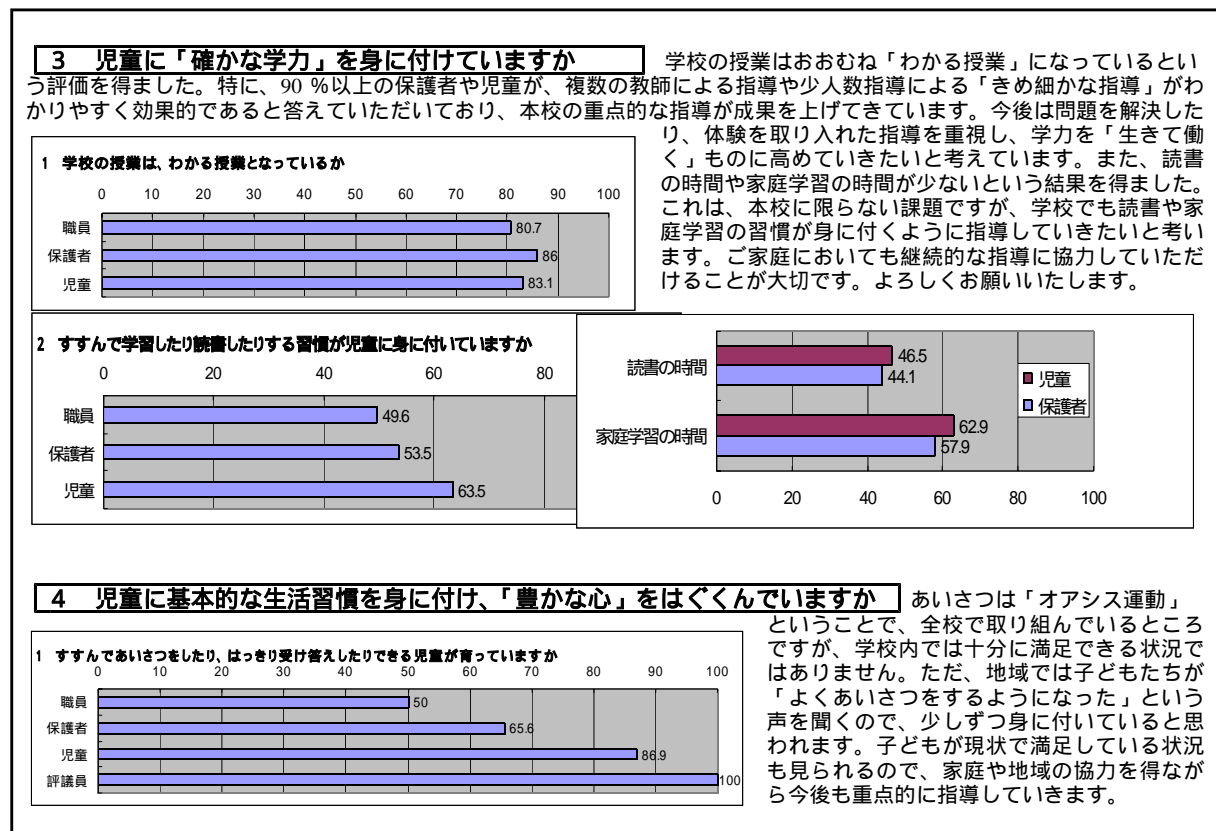


図 6 第 1 回点検・評価の保護者や地域への公表（一部抜粋）

他の評価対象の事例では、「豊かな心」の「あいさつ」の部分で、内部評価と外部評価の大きなずれが生じた。保護者等には図6のように公表するとともに、校内では特別活動部会が検討し、児童会と連携を図り、「あいさつ合戦」という行事を企画し、学級を単位としてあいさつの意識を高揚している。児童のあいさつの状況は次第に改善されつつある。

3 実践のまとめ

第1回点検・評価において「学校評価一覧表」を活用し、内部評価と外部評価とのずれや共通点を把握したことで、教育目標を具体化した「評価対象」との関連において分析でき、課題や改善策が明確になった。さらに、保護者や地域と連携を図り、組織的な取組が見られた。

評価集計後の職員アンケートからも、実施前と比べて外部評価の意義を感じ、課題や改善策が明確になったという意識の職員が多かった。

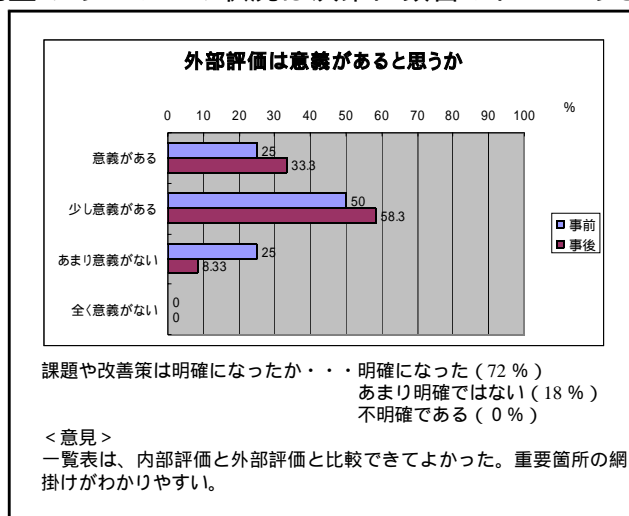


図7 事後の職員アンケート調査より

研究のまとめ（提言）と今後の課題

効果的な学校評価の推進を図るために、外部評価と内部評価を融合する学校評価システムの再構築について取り組んできたことをまとめ、次の3点について提言する。

学校評価の1年間の流れをP D (C1 A1 C2 A2) C Aのサイクルととらえ、内部評価を軸にして外部評価の位置づけを明確にするとともに、学校評議委員会等の組織が機能するような「学校評価の実施計画」を作成し、全職員で共通理解するとよい。

羅針盤には、「評価対象」として教育目標を具体化した経営の方針や重点等の達成状況を把握できる評価項目等を設定し、他の評価対象は「評価対象」の評価項目等との関連を明確にして新たな項目等を加えるとよい。このような羅針盤を作成しておくことで、評価結果の分析は教育目標等との関連をもって行うことができる。

学校評価を学校改善に活かすためには、課題や改善策を明確にすることが大切であり、そのためには、「学校評価一覧表」を活用し、内部評価（職員）、外部評価（保護者、児童、学校評議員）の具体的な数値項目や評価を同時に比較し分析・検討するとよい。さらに、第2回の点検・評価では、「学校評価一覧表」において、第1回との比較と総括的な分析を行うことで、次年度への課題や改善策が明確になると考える。

今後は、学校評価システムがさらに組織体として機能するように改善していくとともに、外部評価とのより有機的な関連が図れ、学校としての自己評価力が向上するような取組を検討していきたい。

<主な参考文献>

- ・群馬県教育委員会 『群馬県「学校評価システム」』（2004）
- ・葉養正明編集 『学校を変える自己点検・自己評価』 教育開発研究所（2003）